
恋の始まり

クノウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の始まり

【著者名】

クノウ

【あらすじ】

twinklingのショウジョウ線でのストーリー。

今日も普通の一日前と思つた。

アツシ達と昨日のドラマのことも遊びに行く話をしたり、弁当を食べながら、くだらない世間話してみたり受験に備え勉強を頑張つてみたり……

とにかく、今日もそんな一日だと思った。

朝、下駄箱を開けるときまでは……

「ショウジ君へー

そう書かれた紙が入つていた。

初めは、なんだかわからなかつた。だが、すぐにそれがいわゆる『ラブレター』だと氣付いた

今までこんなもの貰つたこともないし、貰えるほどモテルつもりもなかつた……

「は～～じますべ……」相手はクラスメイトの女の子だ。

かるく挨拶やアケミを介してぐらーなら、少し話したことがある程度。

べつに好意を抱くほどの付き合いはしていないつもり……だった。まあ、クラスの中でも小さいほうで可愛い部類に入るほうだとは思う。

だが、つき合いつとなると話は別だ。

「は～～……」

「『ラジ、シユウジ。』なへに真昼間からため息ついてんだよ…」「なんだ、アツシか…」「なんだとはなんだーせつかく人が心配してやつたのに。」

「ああ、すまね。先生きたから面にでも話すよ。」「ああ、わかつたよ。じゃ…」

昼休み

「おこおこ、マジか?」「あのちせちやんがね~」「シユウジ、お前もけつじつやるんだな!」「うつせえど、お前らーー俺のことびつて思つてたんだよ。」「そりやあ……」「無口」「口が悪い」「顔がおつかない」

ポカツ×3

「「いつて~」」「何すんだよ~」「うつせえーーもひお前らことは頼らん。」

「なんだよ~、シユウジがどうすればいいか?って聞いてくるから、せつかく相談にのつてやつたのによ~」

「そうだぜ、お前みたいな不器用な奴が恋愛に向いてるとも思えないしよ~」

「クッ!..」「悔しいがその通りだつた…だが

「お前らいじや、彼女もいねえのこえらうつむなよーー昨日された」ともあんのか?」

グサツ!..×3 三人は精神に致命的なダメージを受けた

「シユウジ~それを言わないでくれよ~」「そりだ~薄情もの~」

「う、うう～羨ましい～」

シユウジは三人を置いて行つてしまつた

「くっそー、あにつらに相談したところで全く役にたたねえ……」
かといつて、こういつたことに免疫があるわけでもないシユウジに
とつて、すぐに答えを出せる問題ではない
「は～、いつたいどうすればいいんだ？」

パツカ～～ン

「口う…ばかシユウジ、なにしけた面してるべさ。」

「なんだ、アケミか…いきなり叩かなくてもいいベや。大体、お前
じゃねえのか？これけしかけたの」

そして取り出す手紙

「あら！良かつたじやない。仮頂面のあんたでも好きになつてくれ
る人がいたんだから。」

「やつぱりお前か。」「なに！？あんた嬉しくないの？」「んな」と
二度とないかもしねないのに。」

「つるせー、嬉しくないわけじゃねえよ……ただ…」「ただ？」

「うひうひとに慣れてねえからよ、どう答えてやればいのかわか
らなくて……」

「へ～あんたも人並みに考へてるわけ。」「そうだよ、わかつたら
どつか行けよ。」

「あ～ら、そんなこと言つていいわけ？せつか助言してあげよう
と思つたのに…」

「助言も何も、お前が書かせたんだろ？これ。」

「バカか？あんた。」「なにがだよ！？」

「確かに、手紙を書けつて薦めたのはあたし達だよ。
でも、ちせはホントにあんたのこと大分前から 好きだったのよ！
いやあたしでも、好きでもない奴に告白しうなんて言つ訳ないべ

やーー

大体、何処に悩む必要があるんだ?好きでも何でもないんなら断ればいいべさ。

嫌いじゃなければ、つき合ってみればいいしょや。これが一生の付き合いになるわけじゃないんだ。

きっかけなんてわからない、いつの間にか好きになることもあるかもしれないべ。

あの子が今欲しいのは、イエスかノーの言葉だけだよ。早く答えてやりな、じゃ……

「あつおいー」

そういうアケミは、ビートルが悲しそうな顔をしていた

「くつそー、言つだけ言つて行きやがつて~」

でも、確かにアケミの言つとおりだ。何も悩む必要はなかつた。 よつは俺の気持ちしだいだ。

いつの間にか『女性とつき合つ』と『男』と対して、逃げ腰になつていたのかもしぬれない。

あの時から……

今の自分は何か足りない気がする……

いつもの日常、いつもの光景、変わらばえの無いこの日常。変えてもいいのではないか?

この足りない『何か』を埋められるなら。

アケミの言つた通りだ。べつに深刻に悩まなくて良かつた。あつかけなんかわからぬ。

好きになるのもならないのも、まだ分からぬ

それなら……

午後の授業、ふと彼女のほうを見てみる。

平静を装つてゐるようだが、じつちのほつをさつきから ひびひびひ

と振り向いている。やはり返事が気になるのだ。

その仕草を見ていると、なんだか 返事がまだなことに罪悪感がわく。と同時に可愛いと思えてくる

俺は机からルーズリーフを取り出し、簡単な言葉を書く

ただ

『放課後、屋上で待つてます』

とだけ。

今日最後の授業が終わると、すぐに昇降口に行き誰も見て無い事を確認して、その紙を下駄箱に入れた
HRが終わると、用があるからと誘いを断つて屋上に行つた。

誰もいない屋上。ひとりで待ちながら考える。どうやって話を切り出そう? どう言えばいいんだろう?
色々と浮かんでは消えていく……

すると

「あ、あの……」 小さな声がした

「あ、ああわりい、こんなところに呼び出しだ……」 そう答えるの

で精一杯だった

「ううん、わたしのほうこそ、困りましたよね? 突然あんな手紙渡されたら……」

「ま…まあ、困ったといつよつビックリした。オレ、この手の話に疎くて、その……なんて返事したら いいか思いつかなかつたから、放課後になつちまつて。やっぱ自分の口で返事しようと思つてさ。こんなちこちなやり取りだが、ホツとする。何とか話はできている。だが、相手の子は普段から気が弱い子だ。告白するのはきっと恥ず

かしかつただのう。

ここは俺から切り出せなくては……

「クッ 喉がからからに乾く つまく声が出でしない でも

…

「オレの返事は……」

相手の子は恥ずかしいのかつむことてる

「いいぜ、つき合つても」

い、言えた…

本当はもつと気の利いた言葉をかけてやるべきなのかもしねりが、
これが精一杯だ

「今…なんて？」

「だ、だから… いいつて…」

「え？」 「だから、いいぜ……その、つき合つてしまつても……」

「う、嘘じやないですよね！？」

「そんなはずないだろ！…オレだつて遙かだんだからな。」

おそれく実感できないんだのう。

俺だつてこんなで恋人同士だつていわれても実感できない

その時

「お、おこどりしたんだよー！？」

彼女が泣きはじめた…

「い、いえ。なんでもないです。ただ、安心したら涙が出てわから

つて……

「そ、そつか……」「う、うめんなやー。」「べつに謝る必要なんかねえよ。」

「あーそうですね。」「

こんなことで泣いてしまつものなのだろうか
こうじうときこそ、本当に声をかけるべきなんだろうが、なかなか
いい言葉が浮かばない

しばらくの間、沈黙が続く

「涙は止まつたか?」「あ、はい……」「そうか……」
とりあえずは良かつた。泣き止んでくれないことは 話をふりづ
らい。

「あ……あの～」「ん、なに?」「い、一緒に……」
突然話しかけられ、思わず緊張してしまつた
「う、ごめんなさい。やっぱりべつにいいです。」「
しまつた……ちょっと怖い顔をしてしまつたのだろう。
これでは顔が怖いといわれても仕方ない。ここは……

「いいぜ。」「え?」「帰らうってんだり?」

これでいいんだろうか?

「あつ、はい!で、でもいいんですか?わたしなんかと一緒にで……」「
ばーか。お前、オレの彼女なんだろ?それ位べつにいいじゃねえ
か。」

彼女の顔が涙混じりの笑顔になる。初めて見る俺に向けられた“笑
顔”

その顔を見て、ドキッとした。
可愛い……本当にそう思った

なんだね… わざとまで悩んでいたことがバカみたいだつたように
感じる

たしかに、まだ女のことなんか分からない。つき合いつつてどんなことかも良く分からない。

正直面倒くさいとすら思ひ。

でも、少しずつでいいから分かつていけばいいじゃないのだらうか?
いずれ別れることになるかも知れない。
いずれ俺も彼女を好きになるかも知れない

先のことは分からなーいが、このままずっとつき合つてみるともーい
気がする

隣には嬉しいのか照れてうつむいている俺の“彼女”……

その顔は夕日に濡らされ、むらむら赤くなっている。おそらく俺もうだるう。

そんな彼女の顔を見ながら、明日から始まるであろう新しい“日常”をどう一緒に過ごしていくか 考えていた。

～END～

(後書き)

ショウジじゃない!! そんな気がします。

いつもいつも書いてる途中でキャラが一人歩きして、そのキャラが
しくない言動になってしまひ……

でも、みなさんの反響がとてもよかったです、一冊で仕上げました。
これからも感想をよろしくお願いします。やはり感想をもらえると
やる気ができます。

北海道弁、これでよかつたかなあ?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1306a/>

恋の始まり

2010年10月11日14時33分発行